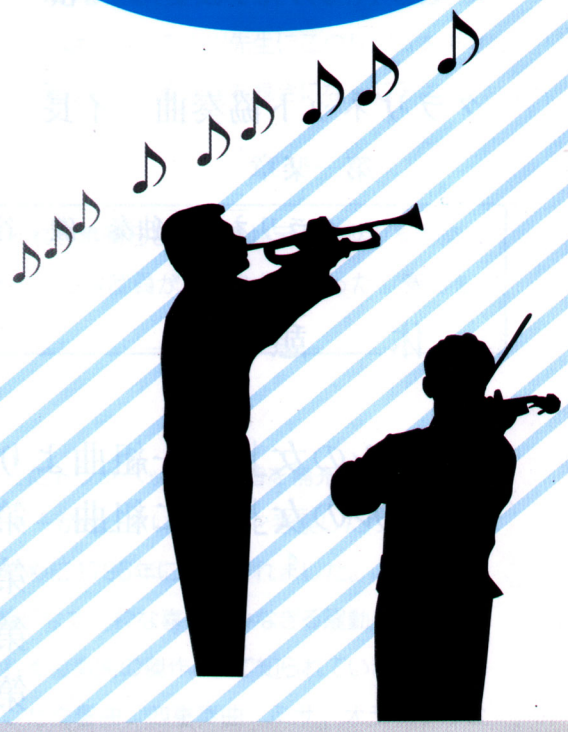
宇部市民オーケストラ　第5回

クラシックの午後

～気軽にオーケストラ

2003年
8月31日（日）
13：00開場
14：00開演
宇部市渡辺翁記念会館



■ 指揮　：十川　真弓

■ トランペット独奏：種田　裕彦

■ クラリネット独奏：磯谷　妙子

■ ヴァイオリン独奏：安永　恵

■ ヴィオラ独奏：濱野　妙子

■ 司会　：松原　淳子

後　援：宇部市、宇部市教育委員会、TYSテレビ西日本、KRY山口放送、YAB山口朝日放送、ウベニチ新聞社、宇部時報社、宇部好楽協会、宇部音楽鑑賞協会

プレイガイド：宇部TYSカルチャーセンター、宇部井筒屋、イトオ楽器店、小野田サンパーク、サンパークあじす、フジグラン宇部
その他ポスターのあるお店でお求め下さい。

お知らせ：当日託児所を準備しております。1名につき300円（保険料含む）ご希望の方は事前にご連絡ください。
託児担当：大村（電話083-927-6156）
当日は隣の文化会館で催しがあるので殆ど駐車できません。なるべく公共の交通機関をご利用下さいますようお願い申し上げます。

お問い合せ：宇部市民オーケストラ事務局　佐藤クリニック内（FAX.0836-32-7514）
e-mail:ube-oke@crocus.ocn.ne.jp　・HP:http://www2.ocn.ne.jp/~ ube-oke/

プログラム

喜歌劇「こうもり」序曲　　ヨハン・シュトラウス作曲

トランペット協奏曲　変ホ長調

第一楽章　　ハイドン作曲

トランペット独奏　種　田　裕　彦

ヴァイオリンとヴィオラの為の協奏交響曲　変ホ長調

第一楽章　　モーツァルト作曲

ヴァイオリン独奏　安　永　　恵

ヴィオラ独奏　　濱　野　妙　子

クラリネット協奏曲　イ長調

第一楽章　　モーツァルト作曲

クラリネット独奏　磯　谷　妙　子

休　　憩

「アルルの女」第一組曲より　序曲

「アルルの女」第二組曲　第一曲　パストラール

第二曲　間奏曲

第三曲　メニュエット

第四曲　ファランドール

ビゼー作曲

祝典序曲「1812年」

チャイコフスキー作曲

曲　目　解　説

ヨハン・シュトラウス作曲　オペレッタ「こうもり」序曲

幕開けはオペレッタ「こうもり」序曲で華々しくまいりましょう。

オペレタの意味はイタリア語で小さなオペラということですが、通常は2・3幕の他愛もない筋の喜劇に大衆的な音楽をつけたものが多いようです。「こうもり」序曲はオペレッタ本来の娯楽性も高く、また極めて美しい旋律がちりばめられているので、数ある喜歌劇のなかでも最も有名な作品として世界中で演奏されています。

さて、作曲家のヨハン・シュトラウスは皆様ご存じのようにワルツ王として有名ですが、この序曲にも、「こうもりワルツ」として有名なワルツが出てきます。

ランナーやシュトラウス一家によって作曲されたワルツは「ウィンナワルツ」と呼ばれて、ほかの地方のワルツとは別格扱いで愛されていますが、このウィンナワルツの魅力は一体どこにあるのでしょうか？本場の演奏を聴きますと、3拍子の間隔が均等の「ズンタッタ」ではなく、2拍目を短く刻んで「ンタァッタッ」‥というように聴こえます。ワルツを踊るご婦人のスカートの裾がターンで大きく膨らんで廻るので2拍目と3拍目の間が微妙に伸びるためと言われていますが、このリズムは大変しゃれていて思わず踊り出したくなります。練習では指揮者の十川先生にこのリズムを再々指摘されました。今日は、どこまでウィンナワルツの雰囲気が出ているかをお聴きになって下さい。

ところで、皆様はこれまでの演奏会でときたま奏でられる素晴らしい音色やテクニックをお楽しみ戴いているにちがいありません。そこで、今回はそのような団員がソリストとなった協奏曲を3曲お送り致します。

ハイドン作曲　トランペット協奏曲

トランペット協奏曲は、当時半音階が演奏できなかったトランペットに音階を補充する4から6個の音穴をもった有鍵トランペット（木管楽器のようなキーが付いています）を考案したウィーンの宮廷トランペット奏者アントン・ヴァイディンガーのために1796年に作曲されました。

曲はソナタの原理が生かされ、驚くほど豊かな和声の織りなす純粋な喜びのみなぎる躍動感ある音楽に仕上がっており、トランペット奏者にとって第一に演奏される協奏曲の傑作として知られています。

ハイドンが1780年頃から死に至るまでの間に作曲した交響曲、四重奏曲、ミサ、オラトリオなどで、傑作と呼ばれない作品は、ほとんど1つもなく、彼の多産性には息がとまるほどですが、この作品もその1つで例外ではありません。

キートランペットは管の途中に穴が開いています。（鼻から息が漏れたような音がするらしい）モダンの楽器で吹いてもこんなに難曲なのに…。さすが、高給で召し抱えられた宮廷トランペット奏者ですね。

モーツァルト作曲ヴァイオリンとヴィオラの為の協奏交響曲

この曲は、モーツァルト研究家のアルフレート・アインシュタインが「若き日のモーツァルトが5つのヴァイオリン協奏曲で追求したものの頂点である」と絶賛した名曲です。ヴァイオリンが、これまでより名人芸的な技巧をこらしてヴィオラをリードします。バックではオーケストラのビオラパートによる分奏がいっそう豊かで暖かい色彩を与えているところもお聴き下さい。

ところでモーツァルトはピアノの天才でしたがヴァイオリンの名手でもありました。彼の手紙には、『ミュンヘンの演奏会は、まずハイドン（ミヒャエル）の弦楽5重奏曲を2つ、次にピアノ協奏曲を3つ　K238、K246、K271「ジュノーム」、そしてピアノトリオK254、最後にカサッシオンK287（ディヴェルティメント15番）を弾きました。聴衆は皆僕の演奏に釘付けになりましたしたが、僕はまるでヨーロッパで最も偉大なヴァイオリニストのように弾きました』と厳しい練習を強いた父レオポルドにちょっぴり皮肉を込めています。

モーツァルト作曲　クラリネット協奏曲

クラリネットという楽器が登場したのは1700年ごろといわれております。モーツァルトが活躍した頃でも、現在我々が目にするクラリネットに比べるとだいぶ原型に近いもので、まだまだポピュラーな楽器ではなかったようです。そんな時代のウィーンにシュタードラーというクラリネットの名手が活躍しており、彼と悪友であったモーツァルトはクラリネットという楽器にも高い関心をもつようになったといわれており、そんな中でこの協奏曲とクラリネット五重奏曲は不朽の名作といわれています。

この曲は、元はバセットクラリネットと呼ばれる普通のクラリネットよりも少し低い音が出る楽器のために書かれたものといわれていますが、当時でも珍しいバセットクラリネットのための曲をなぜ？というと、モーツァルトが「クラリネットではこんな低い音はでないだろ？」と悪乗りして曲を書いたら、シュタードラーはこの曲にあわせてバセットクラリネットを作って演奏したとか、しなかったとか。現在では普通のクラリネットで演奏される機会が多いのですが、そのほうが音も音楽も自然だという話もあります。筆者もそう思う一人ですが。

ビゼー作曲　組曲「アルルの女」

オペラ「カルメン」と共にビゼーの代表作とされる組曲「アルルの女」はアルフォンス・ドーデーの短編集「風車小屋だより」の中のわずか6ページばかりの一編をドーデー自身により三幕四場の戯曲にし、この戯曲の付帯音楽として作曲されました。ドーデーとビゼーはこの戯曲は大成功すると自信があったようですが、初演（1872年）は大失敗してしまい、以後お蔵入りしてしまうというかわいそうな運命を辿ることになります。しかし、ビゼーは悪いのは戯曲だけで、自分の音楽は素晴らしい、こんなことでお蔵入りするのは勿体ないと演奏会用に編曲したのが現在の第一組曲です。演奏会は大成功を収め、これを聴いたビゼーの親友でパリ音楽院の教授をしていたギローが、ビゼーの死後、改めて「アルルの女」の付帯音楽をもとに別の組曲を作り上げることになります。

これが現在の第二組曲です。この第二組曲、どういうわけか現在ではほとんど忘れられかけているオペラ〈美しいパースの娘〉からの「メヌエット」も加えています。この曲は美しいフルート独奏による喜びに満ちたエレガントな曲ですが、プロヴァンス地方の農民を題材にした他の曲に挟まれて、多少おさまりが悪いように思えます。何で入れたのでしょう？今となっては知る由もありませんが。ところで皮肉なことにビゼーが作ったものより、ギローの編んだものの方が人気あるようで、むしろこちらの方がポピュラーになっているとか。「メヌエット」を入れた効果かもしれませんが、この「組曲」アルルの女の成功により「戯曲」アルルの女は13年後に再演されましたが、手のひらを返したかの如くブラボーの嵐だったということです。

今回は第一組曲より前奏曲、第二組曲全曲（パストラル、間奏曲、メヌエット、ファランドール）を聴いて頂きます。天才作曲家、ビゼーと、その音楽を愛し、卓越した管弦楽法を駆使したギローの織りなすハーモニーをお楽しみください。

チャイコフスキー作曲　祝典序曲「1812年」

轟く大砲…

響く鐘の音…

この曲、全曲をご存知ない方でも、「あの、派手に大砲が鳴る曲…」といってご存知でしょう。別に大砲の曲ではないんですけれど。

フランス皇帝ナポレオンによる1812年のロシア遠征の際、ロシアはそれを退け、ナポレオンは手痛い敗退を味わい、その後の没落の遠因となってしまいます。

その1812年の遠征で焼け落ちてしまった「救世主キリスト教会」が復興された1880年、その奉献式のための祝典音楽がチャイコフスキーに依頼されました。序曲《1812年》は、この教会にまつわる1812年の出来事を忠実に描いた作品です。

チャイコフスキーはわずか10日ばかりでこの曲を書き上げ、1882年に初演されています。
はじめはあまりぱっとしなかったといわれていますが、その後チャイコフスキー自身で再演されてから人気が急上昇し、現在ではチャイコフスキーの代表作のひとつとして広く親しまれています。
曲は、ロシア正教の荘重な聖歌で始まり、ロシア兵たちの勇ましい姿の描写、フランス軍の侵入を表すフランス国歌《ラ・マルセイエーズ》、そして作曲当時のロシア国歌《神は皇帝をたすけ給う》とともに大砲や鐘の音が鳴り響き、ロシアが勝利をおさめたことを暗示して華やかに力強く終わります。

独奏者紹介

トランペット独奏
種田　裕彦

防府市在住

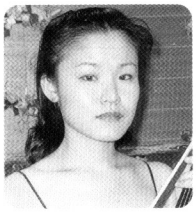
中学1年生まではバスケットや野球に夢中のスポーツ少年でした。

なのに突然らっぱを吹くことになってしまいました。たしか非常に不純な動機があったような気がしますが、都合の悪いことは忘れました。

高校生になって、庄田純一氏に師事、大変手のかかる弟子として現在もお世話になっています。

高3の時、学生音楽コンクールに出場、見事参加賞…。以後これといった実績はありません。

現在、山口ピアノ調律センター技術主任及び吹奏楽の合奏トレーナーをしています。



ヴァイオリン独奏
安永　　恵

武蔵野音楽大学音楽学部器楽科卒業

Vnを御手洗美代子、掛谷洋三、ロバート・ダヴィドヴィッチ各氏に師事、在学中からクァルテットを組み、演奏活動を開始

現在小野田市にてヴァイオリン教室を開く他、室内楽の演奏活動を行う。

ヴィオラ独奏
濱野　妙子

島根大学教育学部特音課程（ヴァイオリン専攻）卒業

ザルツブルグ・モーツァルティウム夏期講習にてM.シュヴァルベ氏の講習に参加。ヴァイオリン教室講師のかたわら、広響、九響等のオーケストラにViolaで客演。'90～'92の2年間、夫の英国留学に伴い、現地のアマチュアオーケストラ、室内楽等に参加。Oxfordにてマッジーニ四重奏団の室内楽講習を受講。

ヴァイオリンを御手洗美代子、知念辰朗各氏に師事。

クラリネット独奏
磯谷　妙子

12歳よりクラリネットを始める。

和田道明、中元喜信（故人）、武田忠善各氏に師事。

エリザベト音楽大学器楽学科、管弦打楽器コース卒業。

現在、小郡町在住。主婦業のかたわらクラリネットを教えている。

宇部市民オーケストラ

役員　団長：佐藤　育男　副団長：栗林　宏明　末永　俊彦　縄竹　俊子
インスペクター：上野　明弘　マネージャー：向山　尚志　ステージマネージャー：稲垣　史郎
音楽・監督・指揮：十川　真弓

団員（◎印コンサートマスター　○印パートリーダー）

ヴァイオリン　◎安永　恵　◎笹本真理子　◎内海　俊彦　○清水　治子　在田　和子　生田　真理　池田　英子
池田　芳江　上野　尚　内田　久士　大田　美希　栗林　左知　黒田　志郎　近藤　哲
坂本　直子　佐貫　政彰　重藤　美言　中村　素子　永本　晴美　中山　仁美　縄竹　俊子
西村　和恵　長谷川　洋　久井のり子　山崎あづさ　山本　顕子
河村　祐子　伊住　浩史　千葉　稲　山本　邦子　山下　陽子(団友)

ヴィオラ　○濱野　妙子　市本　久子　稲垣　智子　上野　明弘　大石　正興　国分　秀基　笹原　千鶴
山田　容子　吉田　進　吉本　宗明　池田　修三　大槻　直美　石森　桂子(客演)

チェロ　○栗林　宏明　今井　健　大森　薫　奥田　隆　佐伯真理子　永井麻紀子　中谷　仁美
濱村　和幸　原田　圭子　原田　典子　藤野　緑　高石道明(団友)　加藤由香里(団友)
澤　明彦

コントラバス　○藤野　隆　河津　隆雄　国光日出生　杉村　浩信　弘中　章司　八木　政治　横山　達也

フルート　○小賀真理子　井伊　秀子　品川知佐子　鈴木まさ子　高井　寿永　田村　知子　藤井　則子
竹本　直子(団友)

オーボエ　○宗國　敦子　石村　愛　岡崎　兆　奈良　知佳　藤村　佳子

クラリネット　○磯谷　妙子　赤司　純平　石川なつ来　稲垣　史郎　大村真奈美　向山　尚志

サックス　安部　浩信(客演)

ファゴット　○小林　太郎　福田　敦宏　義永　由奈　金尾　誓悦　宮下　英晃

トランペット　○種田　裕彦　岡田由香里　長岡由紀恵　藤井　晶宏　藤井　淳子　尾辻　亮

ホルン　○柳井　秀雄　河津　弥恵　斎藤美由紀　濱村　典子　福田　誠　澤本　貴裕　徳永　輝
柴崎　陽治

トロンボーン　○山本　忍　大村康一郎　山本麻衣子

チューバ　砂川　英之　奥中　淳夫（客演）

パーカッション　○高杉美佳子　貞国　泰子　山元紀世子　粟野　直樹　川手　艶子（客演）

ハープ　川口三値子（客演）